伝統の技を訪ねて

島本贈答の器のふるさとへ

発売以来、大変多くの方にご好評をいただいております辛子明太子と有田焼の器のギフトセット。今回は、その器のふるさとを訪ね、有田焼の歴史や伝統の技法について取材しました。

世界から注目を集める、日本初の磁器「有田焼」。

日本の伝統工芸の一つである陶磁器。ここ最近、陶磁器の需要が海外から増えていることをご存知ですか？そのきっかけとなったのが、昨年の「和食 日本人の伝統的な食文化」のユネスコ無形文化遺産への登録です。これまで以上に和食人気が高まる中、"メイド・イン・ジャパン"の陶磁器にも注目が集まっています。

【肥前一帯の陶磁器の里】江戸時代、有田や波佐見で作られた器が伊万里港から出港されていたため、「有田焼」「波佐見焼」も「伊万里焼」と呼ばれていました。

そんな日本の陶磁器の中で、島本の贈答品の器「有田焼」は、日本で初めて作られた磁器。16世紀末、豊臣秀吉による朝鮮出兵の後、九州の大名が朝鮮の陶工を日本へと連れ帰ったことが始まりといわれています。また、磁器の原料となる陶石がこの地で発見されたことも相まって、佐賀県有田町を中心に長崎県波佐見町を含む肥前一帯では、磁器づくりが急速に発達しました。

長崎県波佐見町にある「焼ノ原窯跡」。約400年前に築窯されたといわれる窯跡。

現在、佐賀県の有田焼と伊万里焼、長崎県の波佐見焼は九州の3大陶磁器として広く知られています。有田町と波佐見町で毎年開かれる陶器祭りでは、合わせて約160万人もの焼き物ファンが全国から訪れ、人気の高さが伺えます。

有田焼・波佐見焼ができるまで

◆**製　土**
原料となる「陶石」を砕いて粉末状にし、水に溶かして砂利などの余分な粒を除去。その後、余分な水を除き、陶土ができます。

◆**成　形**
陶土で形を作る工程。ろくろで成形する方法と鋳込みで成形する2つの方法があります。

◆**素　焼　き**
成形後、乾燥させた素地を約900℃の低い温度で焼きます。素焼きすることで、絵付けしやすくなり、絵付き後の本焼成で割れるのを防ぎます。

◆**下絵付け**
焼くと藍色に発色する「呉須」という絵の具で絵付けをします。

◆**施　釉**
「釉薬」をかけます。釉薬は焼くとガラス質に変化するので、つやが出ます。また、水を通さないので、汚れも防げます。

◆**本　焼　成**
1300℃ほどの高温で焼き上げます。呉須のみで絵付けされた「染付け」と呼ばれる器は、この工程で完成となります。

◆**上絵付け**
赤・緑・黄・金など、藍色以外の絵の具を施します。

◆**上絵焼成**
上絵を焼き付ける専用の窯で700～800℃の低温で焼き上げて完成。

陶器や磁器などの器づくりは、成形から絵付け、焼きまでの工程を一人の職人が行うと思われている方も多くいらっしゃると思います。しかし、有田焼は、各工程を専門の職人が行う分業制。この分業制は江戸時代から続く方法で、磁器産業に力を注いでいた肥前藩が、製品の品質を保ちつつ、作業の効率化を図るために始めたといわれています。

分業でつくられる有田焼は、一つの器が完成するまでに、何人もの職人の手を介します。工房を訪ねると、素焼きをする人、釉薬をかける人、絵付けをする人と、それぞれの仕事を黙々とこなす職人の姿が飛び込んできます。「何日も、何日も手間と時間をかけて、やっと器ができあがります。ずっと昔から愛されてきた美しい有田焼を作るためには、どの工程も省くことはできないんですよ」と、職人のお一人が話してくださいました。

多くの製品がオートメーションで作られる今、400年前とほとんど変わらぬ手仕事で作られる有田焼。上品かつ凛とした造形美に、綿々と受け継がれる伝統への誇りを感じることができます。

有田焼の代表的な様式には、白地に藍が映える「染付」（上）、華やかな印象で「古伊万里」とも呼ばれる「金襴手様式」（中）、細密な描線で写実的に描く「柿右衛門様式」（下）があります。

ろくろを使った成形では、同じ形を何千何万と作って初めて、作りたい器を成形できるようになるのだそう。

施釉の工程でも、手作業で一つ一つ、釉薬をかけていきます。

素焼き後の器。ひび割れや欠けがないか、一つずつ手作業でチェックします。

伝統の技と現代デザインが融合し、新たな魅力を放つ有田焼。

みなさんが有田焼といわれて、まず思い浮かぶのは赤、黄など鮮やかな絵付けの器ではないでしょうか。実は、有田焼は時代や流行に合わせて、様々な絵柄が生み出されています。

初期の有田焼は、白と藍のコントラストで水墨画のような味わいが特徴。その後、乳白色の素地に上品な赤を基調とした色絵が魅力の「柿右衛門様式」をはじめ、赤と金彩を交えた豪華絢爛な「金襴手様式」、佐賀鍋島藩の御用品として焼かれた純和風の図柄の「鍋島様式」が登場。現代にも受け継がれる様式が生まれました。

そして、有田焼の誕生から約400年経った現在、伝統の技法と現代デザインが融合した新たな器が多く作られています。有田焼の特徴である白磁に赤や黄などの鮮やかな色をアクセントに使ったシンプルモダンな器や、花柄や幾何学模様を描いた北欧テイストの器など、新しいデザインの器が若い世代の女性を中心に人気を集めています。また、カフェオレボウルやグラタン皿など、今の食生活に合わせた器も作られ、用途の幅も広がっています。

古き良きものと新しきものが混じり合う有田焼。その柔軟性と発想力が400年という伝統を誇る有田焼に新たな魅力を与えているといえるでしょう。

絵付けする筆運びは実になめらか。サッと一筆で三角形を描きます。

柔らかいフォルムとシンプルなデザインで人気の波佐見焼。

モダンな有田焼の器とセットにした夏ギフトが登場します。

島本では、約10年に渡り、有田焼の器と辛子明太子をセットにした贈答品を販売してまいりました。有田焼の伝統的な技法を用いた「古伊万里」をはじめ、博多伝統の祭りを情趣たっぷりに描いた「どんたく」「山笠」、福岡の名所を描いた「太宰府」の4種は、大切な方へ贈るギフトセットとして、大変多くの方にご好評をいただいております。

そして、この夏、前回大好評だった「かきつばた」を再度、ご用意いたしました。洗練されたシンプルなデザインが魅力です。ぜひ大切な方へのギフトはもちろん、ご自宅用にもおすすめの一品です。